宇治拾遺物語　十　（江戸後期）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

宇治拾遺物語

十

三原

宇治拾遺物語巻第十目録

一 伴大納言應天門焼事
二 放鷹樂の選に是定の事
三 堀河院の御時の笛の事
四 浄蔵が八坂坊へ強盗入事
五 さうと酒のみの事
六 吾嬬人止生賀事
七 豊浦の豆事

福山大学図書館

八 義人仇死乃事
九 小槻當年事
十 海賊發公出来乃事

今をもむかし水戸尾乃御門の流を死より應天門の
人乃法をさとりあるとあるとあるそれとは
大納言あまとし信乃大臣乃さとりさとりとと大臣をにや
をもとだかれかくぐ流つこせんとせさ響流ふかてこそ忠信
世乃渡しれとこそとの西三條の右大臣良親よりたばりて白川
よりあるとあ流へ河りてお乃事流きくかど流き流
くに烏帽子を畜あくく移乃馬よりるき流くたり
あくかの乃陣まで切そして出あるまいるに行てこ乃
事や人の讃云りを伝くんお事にあさせ流おとを
あと乃乃事なりあるあるとさ逃てくさくさくして
まあと乃さあるそして切とあるせ流べきるりせ

そうし給ければ誠にもとおぼしめしてたゞさせ給
ふに一定もなき事なればゆるし給ふよしおほせよとある
宣旨うけ給はりてぞおとゞは帰り給ける左乃おとゞはすぐし
たる事もなきにかゝるよこさまの罪にあたるを
おぼしなげきて日乃装束して庭にあら
こもをしきて出て天道にうたへ申給けるに
ゆるし給ふ御使に頭中将馬にのりながらはせまうでければ
いそぎ罪せらるゝ使ぞと心得てひと家なきのゝし
るにゆるし給よしおほせかけて帰りぬれば又よろ
こびなきおびたゝしかりけりゆるされ給にけれど
大やけにつかうまつりてはよこさまの罪いできぬべ

かりけりといひてことにもとのやうにみやづかへもし給
はざりけり此事は過にし秋の比右兵衛の舎人
なるもの東の七条に住けるがつかさにまいりて夜深
く家に帰るとて應天門乃まへをとをりけるに人乃
けはひしてさゝめく廊の腋にかくれたちて見れば柱
よりかゝぐりおるゝ者ありあやしくて見れば伴
大納言なり次に子なる人おる又つぎに雑色とよ清
といふものおるなにわざしておるゝにかあらんと
露心も得で見るにこの三人おりはつるまゝにはし
る事かぎりなし南の朱雀門ざまにはしりて往ぬれば
此舎人も家ざまにゆく程に二条堀川

乃ゑび行よ大門乃くるに大あるとそて大路乃ゝ
見くりてこれぞ内裏乃方とみ奉さへつりされ
ぞ愛天門乃おりくるとをくしさるりきと
と乃あるとはるふ人どもいご乃火はくるそてよが
ると立りけるあるとんくてあまども人乃きえ
ぬゆる大まるまぞあくにするとかりていさ
ぞうる乃くち花のかくれ出るとそて羅か
うあり行へくとい乃ーるふあこれくるんの
あくあをいくきまとくれとおるへどいいつぶべ
きこくあくあくいとかくとおりあくにおくぐ
ゆるされぬときをはくるのきまとそつみこう

乃ゑはくるのありきるとはんかくれきるふかくて九月ぞ
つとありぬかくはゑりとあ伴大納言乃出納のあれかれ
ゑをとゑ人ゑ小童といさられとて お納乃くまきを
いぞくるとさへじとすんにお乃出納おのぞるくいぞく
乃るあよ ちるくあきるあちてあぞゑ紙ぞ歌に
入くお乃ゑ人ゑあれ饗をあてうちあをて志ねがう
つとあむ 食人おりゑ乃くりるぞあもくるもとあ
童ういさられあり 芦くさて をあぞ 乃紙ーを
かくいさ者 かくあむさいくあ 紙事ありとさ さく
志くてかくこそはいりであるきを風くかさい紙をの紙か
をくそするうとくえぞ出納いゑ乃くかをへ行事いゑぞと

移りきつるおまへだちとれおのれ面をいとろうちきら
んよあるよりとりあくべきぞとりて名大納言殿乃おそ
ましせどいそぎ出あ面まちぬ出きうとをあるよりとれい
ぐりとくべきぞとまきてうちいれとりて金んあり
出よさ　こえくおまへいあるよりぜしてぐりとうと乃
大納言ばりくまれおりのりとのぐちくへ乃口にゐるて
入りてこいあるとするまて出ぬうとうロあをてくちをのう
ちくへ入りていあるとけん面をこれきれど出納ちきう
くめちさして乃よりこい入りきりこ乃いさうれをうとる
そて里とあり乃人市城ちて出くきれどいるにいふ
うとこにあくんとおくあるいまるよにうあるいる

くおりとちうちくこいれさえ出きれど世ひろあるとて
面をさで出ちりて金へをりてをそれ者ぶで先
まあくおれきまどもすと穂ちぬ面くとこれ
ぐあるとれちくうとり乃ちとりて出ちりくち大納言
をとうれをとちくおとあくうれてれはん流さまを
を系穂天門と焼くまるとれ大臣にあるせて世いおて
出流をきせちくて乃大納言あまぶ大臣にあくんと世
へきるまとれ入りちくうとうぐ出流きうれきんいうり
き面くおりときん　放逸樂とは樂我明還已薄
きくこ今いむおりく放逸樂とは樂我明還已薄
きくこ一人あるれ流へくめりきりと白河院野行遣

あるてといれをはよ山階寺乃三面の僧坊よあるを
きるふがちゝれそ門おさ〜社さ〜ぬる人あ〜んをもて
いれ〜まちきるふが業乃ぢく入きる人ありこれ
樂とふよ是ゑ業よありといふ放逸樂あられよかい
れ市きびをうなりとまつるふがれちち坊中ゑ道て
伴乃樂樂流ゆへをう
おをきをいまの京ゑ堀川院乃御と紀奈良れ僧と
をを先して大般若乃法讀經ゆこおられをるれ的選
こ乃中にさいる其御よをとれ笛樂ありうぢ〜きるか
ありくよ朝ゑ樂へくゆ世法れきるれ的選調〜
ぢとにこ急さをぢへまてゆをく是いをとあ舞〜こ法て

ゑ乃僧を先〜きれを的選ゆきまつきて舞よいゆをか
よゆをとて乃ゆをとてゑれるれいゑ笛やゆをとくこ勢
ゆをを法〜乃ゆをとく法ゆをつりいををけ
きいされを〜ゑとて法ゆををゆれをくゆをゆせこれをる
よ方業樂をゑををいを法ゆをれをるとをれを御感
ありををくなりをを乃笛樂ゑれをくをを伴乃笛
作りをいゑ八幡別當幸法をとをありをを伴笛

幸法進上當今建保三年也

あまことも今いむのこと。天暦の古後の浄蔵が八坂乃坊に籠盗ろう乃数入ることあり。ある夜のこと。太刀佩ねき法をとんさるとてを乃くさもちてくみてさ
ぬよするふもとなり。ゆもしろく数刻を抜。夜毎ろくあ
きんやしすが河家より浄蔵が来るに啓白とつてきや
ゆるしたるに毎ごとやきり。それより盗人
どもいつばらうすてにきうつりけるふとろ
今いむこと。播磨なるきんゆきごみよさこゆのとてよ家
ものもとにあつてをものもあるあきむねとふ
をの乃こ文ありうの乃さこゆふさの波寄さとなりごを
よ阿波へかくごをけるに乃りて死をるしれのさこゆ

そ河内前司といふ人乃法いとしれたりけるそれ河
内前司がもとにあ先まゐりける牛ありもろと乃
牛飼人の借て車をもて淀へ参りまゐるよれ川めの
橋りて牛飼あく座りて庁橋をとりてはるとおと
くあるとけるあ乃むれて車れたりまるとたこれ打
きるをとくる海乃おつるとこ乃してうしれあをひろ
つとて出てんきれもむあるひきれくるまなおち
くるるをよあり うしい一橋乃うへよそ海りて
であるとけるぶ人をれらあ車なりきれをうこ風て
ふあくくをあるとをり走を牛あ海りをひ風く
おりて牛をうとあをれまいをう牛乃おりあ

うり乃あんの人いれを先をるかおりてお乃うし牛ひをうう
をどにこの牛いりありてうせをるといふあとあくてうせ海り
といふ牛るを事でとをとめさををとあ一だあまていでる
おとてらあくるるとを走く海ぐ乃るりを先さすれどをあを
まををいうでおりけるうしいなうしなれ海るとなをくなどに
河内前司ゆ乃ありよみる乃をこれをうゆう牛をるとあれいこれ
を海りよおち入をく牛をるとと牛くを人をいりにきを海よおを
牛りをくいであれくあり牛れををうゆおりて海うとれを
ことうしをら牛をみをよあるとるまををり日にでひ海牛
牛をのをとにまありて昔をうを作るありそれをあ
まを罷乃あおくをく河乃きをめておをく作也べ家物

乃ちまへまいりてかちくまゐるとゆゝるがくるにきのまこのあきん
まふら氏御車牛乃ちからのつよくてかれ利くかくはよい
おそくもとまんさせ給へぞといふまで文め白あかちて六白とやさん
巳乃時ぞかるとはうたは過しなかりんいふあれは思ひ給ひて
とうんとくさりんはまいり。かく仰御義にして三つまでといはれてる
ねぞう乃義こ清るよしる六白といふ巳乃時ぞからはれぞ給
まこの牛あゆみ入出まりけるにかいつぐく大事志とり老
りてくまいまに吉くかれあせぬりてぞ入出とりまゐる代
む清光のちからまて車かち入牛などゆりきり帝る
おつまなんどにわあれはくちから清よ紀牛乃私かこそ
りりて乃つよきてありきゝ帝るりやありけんとかりれ

きこふをねらひ給しかば帝ると河内前司かねときも
是はむかし山陽道養作といふ中さんかゞゑとや神
おもしろきもかうやたともちられハ中さむハ猿丸にて有
んれとすゑの神年あとの条よかゝしつまゝの忠
我まゐる人乃ひむも見れてちよくかんけかく無上給
とう御前のかりしまにもかこうる牛を分るまでて思ひしれ
をとおしてなるをまゐるもりしまりつまにつまからで乃
まゐ川つもかくさりぬしぬるれはある人乃女いまこゝ息子
さしあへ難題ニよおり給ふと云ゝきかゝしむかで給ざ
つとあり人乃お金子みとけゑむとへさ乾の世乃ちかう
あり帝れど、あやしみをとぐれもとゆくりやハ思ふま

して、後のよめで、きこえぬ。ゆうをはらとして、
後のあるに、はしたなくもとりて、乃ち、
やうやう月日ゆきて、乃ち、
みと、遠くいまいくとも、あるにとかりよりはきて
月ゆくに、くるしき、
あはれ、乃人の、ものとのこと、
とよりの、くるしき、
乃ち、
こと、乃ち、
乃ち、

よし乃女は、父母のもとにきこゆ。
ぐ、女の、父乃ち、
ゆくに、
思ふ、
世、
と、
あん、乃女、
ゆうの、
ありさま、
ぞに、
まれ、

たとへば前方の言し事ハまことに神も如何に侍らん これこの
きやうもんのいはく忠をしるさずして亦女君をも流
かくるあはれをもきつ命して死ぬまでも如何に若は
まことにあはれいかにしてかなくなりしをまちてきより
語言せんは女性の為まへにはいとよきものにて涙く
つまどりうちおもひまゐらせて表見語らんゆくしかる人を
まゝならじさてさて光とぞ侍らんをいはしきを知り候
その君枝にも又あつきを語ると語らんもあるにしてまれ
たゞよのまゝの事にゆるし給ふさま海にて老たる人語らるよ
たゞそれとならせ給ひて内にまかるこの女のまへとこれにて
これもあなたもおかくしり行まりあるべきやうにて

し難もする事ありてさるいとまあらんとする事
前にさしの神のとくにおはしてねざめかなかな流るゝそれにも人の
きなれのもうて来て替事あらはれるかきれいに語らる
ねきとおもひあるまにありて更にいふことあるさまにかなれ
人の事をなしいとゞ涙くまし事をおもひそれをいひてを
あしうさむしき事を語る姿をもとめて知る事あり見まく
かく志るし書つけしを聞く志とぬ中人のことにはかな
命ふるにあはれまへとこそ見るにもこれしきしなり
かくさしもとよいかにしてか乱るゝ所にて
をしき志まゝのたゞおもひくるも女の父母にもやう
思ひもあるにいひたれど侍ふりしたの事に流すれ

[illegible]

と食ろうせてくれ給へ。さてぬしは猛丸と大とう
かく死なるにつけてうらのこゝろをせく猛丸と見てくれかし
うらもてそれうちもとかまをかすゝめてぬるれて
いくゝおきて太刀ばかりを死刀をとる死鎧をとまうをきてゆく
こゝろのあれをとゝとさにもるをゝあれさ死乃せよ
いうあるゝ奥をしてれ今よりおくりていくばくにあり
俗なんとすんぞまてはつそうとやはいへいの乃ちそ
さこれのかくれ先ゝ到きさくゝあんもとゝ拾られ給ふ
乃ついとゝ伝なくゝあるれるれどゝへくゝあもさゝとに
いうかるゝ人乃ゝ拾てゝ思ものゝ給よかをいれつゝ
まてかるゝうあゝれあるゝとゝつゝ。さて乃ちなに

て此祭乃日になりて宮つかさよりはじめてよろつ乃
人々おほくあつまりて迎にのゝしりきてあたら
しき長櫃をこの女のゐたる所へさし入ていふ
やう例乃やうにこれに入てその生贄(いけにへ)いだされよ
といへば此あづま人たゞ此たびの事はみづからの申さんまゝに
し給へとて此ひつにみそかに入ふして左右の
そばにこの犬をとり入ていふやう
をのれら此日ごろいたはりかひつるかひありて
此たびのわが命にかはれをのれらよといひてかき
なづればうちうめきて脇にかいそひてみなふしぬ
又日ごろとぎみがきつる太刀刀みなとり入つさて
ひつ乃ふたをおほひて布してからげて封つけて
わがむすめを入たるやうにおもはせてさし出
したればほこ榊鈴鏡をふりあはせてさきを
ひのゝしりてもてまいるさまいといみじさて女これ
をきくにわれにかはりて此男のかくしていぬるこ
とゝいとあはれにおもふに又無為に事いでこば
わが親たちいかにおはせんとかた/\になげき
ゐたりされども父母のいふやう身のためにこそ
神も仏もおそろしけれしぬる君の事なれば今はおそ
ろしき事もなしおなじ事をかくてをしなん今は
ほろびんもくるしからずといひゐたりかく

くいをうち、あみ戸はかせ、よりてさうをうち、和尚のとゐをうち、
をしまして、和乃かまへの戸はあをてをの出横をとさし入
くる戸はりとの角のうにさしてうれをうちをあ乃うにさしたう
さはりをうめく次くの間をを次第にをれあるうちさ
あをとにこの紙門をかれさきしてををうれあれをあ
をてあつまへををれくまをとにををいつたかるる
猿乃半をを七八尺をうをひるあるをとをうとをあ
くしてむしーをとをうさはきうを角をにいつあるをうを
うををいかれあるうをを半をるををはをしてうくをを所をあをうはを
き、れ猿くをを左右をを二百をうをあるををあををくく
をあかくはをまをあををうをををくくをるを

さををび乃くしはいをを大をるをれいををあをを角下
刀はは具をしてをはを半をうをがをををはす酒をを入をを祝をを
ををををををををゆるあをををを半をうをををををををををを
をあるををにを乃をくを所をあをるをを猿をあををををを
長柱乃ゆをををを半をくをを猿あををんををれを次くく
猿をををれをんををるををにを乃男をををををを
をを乃をををを二れを大をををををを中にを大をを猿ををを
にくをうをあををををををををを食ををををんをををるをを
をを山ををを山をを繁をををををを柱をををををを水乃角を
角を乃をはををををををををを板乃をををををををををを
ををををををををををををををををををををををををををを

まへなりてさえ袴あをこてやは捨おきてやとさら
をとの流りくるまどて得ふ若く此袴よゆるし給へ法師も
よくおしかをせら給ふといへ斗をしこ乃あづまへ人さ頼み
ふされ法師人乃いのちをとをちあるまをものなれバこさや
法ゐと是乃くまむしさしてきんと思ふなり。取返てそあ
かりまでもちて出よ縁さ急んくるしかし法といひく主経よゆる
さ給ひし法師どれこ乃経のくれハなをき取きまねとそ
ゆ多こそし其法ゐさもとよ法どいれしてまそ出よへきか
其あきれたりついでにちるもそを持出て行やすく。
今より是乃ちゃかく法師も更よくまぐのうれ法師ど袴を
いへそ是たるとそいまのふる法しかく法をとおせそ

といれなくめてゆるし法ざて見れすり乃ちゃはなくさく
人城乃程に思ひよきれ方り成まりさて其の男家よ帰そく
いまにり男女あれおもしろく年比乃毒丈よなりて
ゑなりしきりそ男ハ色とくより行へあかりける人乃も思
あらせなれどくちおしかりねさ治りて得わまのゑなれ
ほまてかの家よ猫康をなんいまと思ぬしらくわ
けりとぞ
今はむかし稲原乃法門の御子弟乃淡子となりてさまの葩
八大あまんといふあるま来り受領して元は刑部丞大和守
まそなんあるけれ世乃おとなまよく思りなさへまれを
れく大なきの法蔵もとよ紀あしきすへ志のもなく際ち

国のなかんづくも京のあたり一あきこゆるのうち
人あまたもと京の外にはなく住てうれへ侍りける乃
家の守りは我なさるゝゆへに人の也と道理ありてうたて
も思ひなりし所とは思へどいかなるおもむきの事にも人
きゝて除目の折ふしこれ大君のおもしろくおぼえたりとはいふ
事もまた清用ありけれどこの大君御いますかりて除
目のありしとはいへどくち惜くれ君いまさぬ所の大君
の宸襟もいまた法とありて名をかゝりぬべしといふ人を
もひきてすゝむるは思へども此あなたも清むる人は
有りおぼしいれ給ふ御事もなく大君の御いはく清ひて
前のよに我しあかねば暮とも御座ありて申んうちけるを

するべしといふ人の申して御所にはおほく人なりかたると
あしく所をさだめしとなん世にはそれぞれ当るに其内にも
事をとめて其の大君いつく除目をぞいたしつるに其内にも
おもふ旨をもとより其の大君もいつく除目をそいたせる
とかんがふるにも申しいづる人ありとはかなるかんがへ合せられけ
家あまきも田村水乃おんこの流れに出であるけるにや
今もむかしも円融院乃御時も内裏焼亡させ給ひしに
あつかしく申しける殿上の其盤ならびにあまた見え
しく物くれ給ふに諸人さては是にあたれば見えあ
てら林のありてそのゆきにつらなるといひ給ふ
南く見ぐしにあらせられあなしと見えて殿上の其盤は

かきりある路なれば乃じをとくとくとかと川めく都られ
ありし世には小松の大臣殿実賢公はまつ一の中将にて御ゑき
ありけるに越司小吉式部某乃ねぎ申を以て御ねられお
こきと乃行れまれどもそのきゝつきゝるまてわこすれ
まくこの事を御覧して其後あらばしさふらいさぐり
ろくや死路はよろしり。いゑじ執きさり御といふを執て
てあつきとあゆ敵よ人ひと人をのもたかふ流狗かり
残りおもしまれども召て心きこえけるかくさ左底に三舩之
ちかく其中将さりそてある人執事ありし流罪諸司
乃下部めしてかきこれてよしと申とけれ流の院く之方
陣まちくらべきとや世まで東乃陣よりかとをべ

きのふとし乃縁を執て内乃人あるかきり東乃陣
よりかくれてゆく也とんさて流されお流するも子らなど
にさかへて西乃陣より殿上乃せしり見ありしかよぞて
く出ぬままに人々もしや見えもありね陣乃口かきいさ流
なども又乃三位きてむりへとをかくるとぬぐしさを
人々は見あまたありぬる事抱れ都とある人々いふ者る。
さてサ日たうをありく此中将乃首はあかし御覧う
けてつこきうかきまてしあて抱をいふまきたいとこれ
しくをも乃末り死のそち様くさせ行すなる事と世こ
よさき様中佛だにそろうちて西するといふこさせ流ちて
ざら佛しつはおかく乃人は西様してかるんに死□

そもそもこれ
ぬとかいんぎょうのようにしらるる
今いむかし、豆斗頭小槻當平といふ人あり
よに第博士かしるもの乃あり名を家分とあいふ
ふ主斗頭忠長の又淡路守文史奉親の祖父なり
いきさしらぬなんぢとかくありぬべきもの乃あれども
ふりしきぬあんまきが出さしられども斗頭忠長
助右文史りは左と人を祝しうる者をあるうん
ろとかりつくるとくめる威あるふうへよ求めるくん
さくへもうる物ありきれども古伝あるべき也乃おかく
なるく祝と為さしあるくあるもてゆきとだおくて

もあるとかんとかのしあるもあるふよ式人の家にをし
祝をつりきれどそれと祝陰陽師ま物をとかよい
見るべくをとくかくしし必べき日とをを祝べくこう
をさるもきれどそれきりに門を法よしさしてしの
いんしくく居るめるに敵乃ものくきく陰陽師よ
死ぬべきをさをを祝をを世者まだそれきりをさ
を陰陽師乃いをを物長してなくふかくしむ
為祝日にてあく祝をを乃日とれあんを世をを
しあるべきさうをををのき祝がってそれをにあを
をくくよびいで祝へ門を祝ふあらをををもあをを
をくくあををくきているあくをのそふをくあう

あんとしのはるまで陰陽師をかぐらしてうれば家にい
きて門をおしたてくるくるとたくさんの死をれば
さてはどこのかたとしれぬ人のかたちのの
まりてさいはひのあるいとうで死てきぬつるもの
わをうにあをくいまは行へ大切の事ありとつくとれば
あの下は男のうり入るかのうんとのへでいとうるれき
ことのうり世のある人乃ゆ思さぬ金くあるの事いまと
さてまつくし受よぬうるのをくなり行ねとつて
とれば事こゝの人をうるで門をたあを行さとも
うれ命りのかう新をさう出行へこづくきとまんと
いへで死ぬべき宿世やあるとまんの事ぐとく

命つる戸のうあの様さうしてさうをれば陰陽師さて
乃あ文様きくあのとみくまへまかどるのろれ門この
あくんとのの人をいうで死大事のいくんとのれつまどもの
命死ぬとも物で様だ出さく人今のあるくまるれどろの
うりやうもしとおりれくあるうて死つるありどや
入行様とのへ人をて大事のもあるどうるとけ系出をたり
かくく人をこれかくれ物でくねるれとのれくく入ぬ
ろまるうして命りて死いくくあるとて言とのよ志
ょありされで物ニのよのあるそかくよ出ろ乃へりはあの
うり死ありどやうにまりりどすろ出人のさんうとそ
まるよ行をてかあのりさ様とれ出でいとれうろうき事

ありさてそれのうのおとをきせーしんとうくなどあく
く狭(せばい)よあれくさてよりうそそ所にはのけるうやあ
さ海ー花事ありとかんんのかちうー
いまこのそむーー接近はいつもしとと光さてる八乃
かこけれうちうくくれさるべの海賊(ふなぞく)よあれうう
としんの地獄もるにかぐくよいよ屋ぐれるとめく
つうーかうくはおにめるうーりとーあうーー
ありめるる地食物よあきうちてあをこれ海よ
うかびくく世海ぐるーー演路乃六郎はいかく
しとあんいれーーそれよ安藝(あき)より船りておとる
をおとにあるをしに私一そうちかく漕(こぎ)ぬ

そサスんちぐうとれ男乃きてよ者れうそうとかう海ーそ
あるるさていしあき男二三人ぐるをしてすぐりよんあ
まて来をかとをうよ紀れとあるべーしをのぐりもぐれ乃
隙ちうれてあくぐれどあき三あ地ぐうく海ぐ来ー
よそうくしき人をあくてそぐ六乃るあにつきてあ
つく屋形のうへよりあき僧一人あく紀ちんてあり
うぐれを行ちーあーにてうう船へよまいあるぐ船よ
よるとまれををとあるとあどもれぐ乃あ船をを
をあるうきうしあやーとるつく向てんと行れてくこへ
いうちううへ乃かくぐあよのうぐうてをかうをすぐう
うをれををるへ人よかうくへを用防の屋ちいそぐを

あるときくさのあるさるべきそのもとき人もがせぬど
四をはしくてあ乃れ名残とそのこてかくつきゃも
海ありとゆくいとわくかまりとかまれくもまきし
京より海ゐる江もあ〜ぞ義より人海あり海つをて
きそくれりくんくごらんもるいいでかどしてこそある
ぞ京よのがくん毋にかどしてこそかそ世先とゆへ
さらぐあもこ我ハさもいにをせ先おそれハ移
れ毋めぐしてあんとて渡りくまこひるあにぐ
くこ海りぬ人こを先で今ここよ紙にまるめれぐ
こ乃毋うにしくんとてゆ毋にれ乃る河よかもにか
毋ぞあきれまとひくり拙乃あるあぎりまるか

にあれ法人ぞもいこれ男女これ海よとるへるに宜
人よ紙こうくとるとて水精乃ぞれ緒きれくん
毋くある海をきくくとあがしていくくまゆ河乃
拙をこれとり法人そぐ系今乃ぎるとハそもを法人
京よ老そる歌乃あきるにもづくれくいま一度えん
とゆそれむよ系紙ゐるして法ぎにはくくれ
きつうぞまるのがるありとを毋いれ毋で
我よ同紙えあくせくよ紙もるさ海いぐ系あき
かくあいくせうまいあおくとをとてよ同紙えん
あくせくあきぐ海ぞふさ海いとくいぐあくれよ
むさうにあぐ毋しかとをこれていぐきんと思

船してうみを入道金形の上に廿斗ありてたゝよふ
あるを僧の経袋くびにかけてよみける経のみつ
海をとおく海に入ぬ入道是を見てよみける経
袋をとりて水の上にかへりけるに経袋を
くわの経をさゝげて出てする時にきぬに法師
乃今まゐらせて志かぬをそて舟のうへにてかしら様こととう
ちせなり紙つき見れはすれどとうき出てく法師此
経をさゝげしおきしとおもほくあくされは此僧
此海にうかれたる所にうけとかたるき童の
むつしゆれ其子の志るきあらん人をとゝまちしに二三
人斗に此僧の力からよく様のきこ一人は経をさゝけ

井ろの紙をとらへ申すりと云ふかさへ乃まりのぞきしてあれの
よ志乃僧よ法きくわれてうえへたなまづとみへてつらく
更よ入なしとつ小家内にはあしかりよき〳〵のあとそ
ひくあへて海よ志らむみをとめしかあひくありあやし
きれむらんとかりひく これよとりし法きておとて棹をとり
さし舟のせよせたるつき子ら家をとりよせかまへ人く
あどかくさる中するそりよ いなりけさするとみへとさきれ
此僧おもうとハつまんそし身にのもいらかくあれとこの
よろこべ其えても此僧よ同家ハ京の人のいはこへおく
もなたとまんで紙のの人よは法師よなりてえらく受
戒をうけ侍る稀でいりて京よのぼりて受戒(じゆかい)せんと申し

かぐつぐれなどがてて山よりとりくるる人乃あるにや
法きてせきたんといしかぐ俗りみがもしたるありと
いわさと僧乃既屋にあるとりつる鬼ぞをいかもて
何ぞとと人ぞいたるさかれいたるさしたかしばといい
へさて経さぎやりたるいれしもきうしたやりたる
もうもく何とかれしくさいまもあんとするにこの経
袋をとさぎたるとと人ぞ死あんもぞかとかれしまう
をそれでいかちもかくもあばどれてもぬもを経
をもぞうを経をぬしなしとかりしくさぎなり
しにいれそあくもあばあやまるとてかくてのいれも
あくなるあるうとてそあくさけらまさかれたまぞ

れたるうとあそもあべきかちうをかがいつまいか
いまさせ経さんまうまつ死事とてなくにかの波女経
門乃経あるふしあをまにくかとくかがくおまき
ちるとあんとやとふまくるとの乃乃ちとて文戒
とぎんとあるあるをとんといへさにあ戒乃をを
今そのたばさくはさかれあんといへさおまきりぬし
ありてんとすそてもうはくかとはるれまるかいあにくう
かくみはるとかくまだおの僧衣にくるとくかがく
くかかくかるとかれまりはたはんまるとてはあも
ふとくなくれ乃かうはしきあにをしみそてまう
それだ十経せはの乃かくかるはるにてといよ。

この波女羅門乃屋う有る色乃人ゟよさえ仏経ハ先
でまくらをくわきしまれを乃あかしやりと思て
此乃僧まがらして山ゟるがごとくいふなんと思ひなほきぬさ
る此僧と二人具して出てまありとかゝらしておつまの
者どもハさて是をれ此乃人くに豉まてゆきべく人を
とのまくきまよりおもしいけまよ依乃為なせにありじ地の
法さくなをなりとてせいしさてむきいとむ於りでち衣服
太刀かくされ色もなにもて此僧よ具して法師の
山ちかき家成よいきて法師よありてかさりて経一
部よみたまへせそくかてなれあらくかり給ひつ又ゑ
のこほうりもてりしがむまくにかゞりくる此男かよ我もてま

こく其経くとありき涙ぐみて此法海よのへしまがゑ
仏切ありてきぞれよいとく此僧よ十羅せ法乃ちから
おそし涙しきるとおもてよ法花経の其くさくよ
すんなりさ涙くわりしくぶえかよかくなりて
有家ありとかくあまたるまき